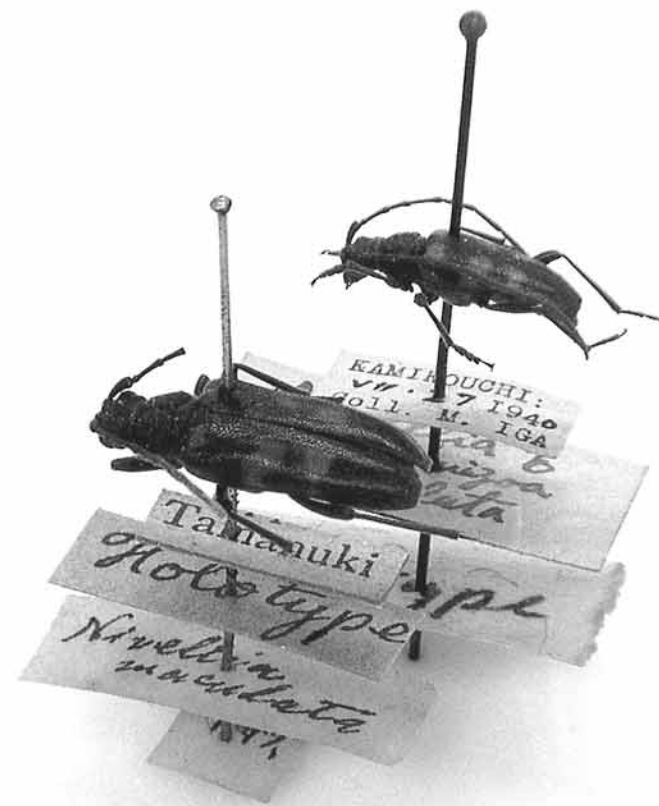


たまぬき 玉貫標本



Nivellia maculata Matsushita & Tamanuki, 1935
(ムナミノハナカミキリ)のホロタイプとパラタイプ

当館所蔵の江田コレクションは約27万個体の昆虫からなっており、美麗標本を多く含んでいます。これらは常設展示に一部を紹介しているほかキャラバン等で展示していますのでご覧になった方も多いのではないのでしょうか。一方で江田コレクションは「玉貫標本」と呼ばれる約70点の標本を含んでおり、これらは記載分類学上重要な標本群です。

戦前、戦後を通じて長くサハリンに在住し「樺太博物誌」、「樺太昆虫誌」などを著した玉貫光一氏は、カミキリムシの研究者としても著名です。専門誌に掲載された記載論文だけではなく1939年と42年には「日本動物分類」のホソカミキリ編とハナカミキリ編を上梓されています。これは図らずも戦前の日本のカミキリ研究全体を集大成する結果となっており、現在でもハナカミキリ類の研究を行う上で重要な文献です。そして玉貫標本はこれらの根拠となった重要な標本なのです。

ハナカミキリ類には地域変異が激しいものや多型

を示すものを含んでいますので、古くからそれらに対して記載命名が行われてきました。玉貫標本にもその研究対象となった標本が含まれています。それぞれの標本の記載分類学上の位置付けは標本自体を再検、ラベルを判読して文献との突き合わせを行う必要がありましたので、愛媛大学の大林延夫教授に検査して頂きました。その結果、種階級群の担名タイプ(ホロタイプ)が25個体(種、亜種、1961年より前の変種(v.)と型(f.)として、それぞれ20,2,1,2)ある事が判明しました。このほか、ラベルの採集データ等が記載論文と一致するためホロタイプまたはシンタイプである可能性が高いけれども明確なタイプラベルが付けられていないために断定できないものも6組存在します。

またコレクション中には変性種(ab.)のタイプとラベルされているものが12個体あります。これらは命名規約上は亜種よりも下とみなされ、種階級群の適切な命名とはなりません。研究史的な重要性に違いはありません。

古い標本ですので状態は必ずしも良くありません。標本には真鍮針の腐食やラベルの退色もみられます。虫体に欠損が認められるものも少なくなく、中には虫体が失われているものもあります。博物館では保存のために最小限の手は加えますが、基本的にオリジナルの状態を保つ事を第一に考えています。これらのタイプ標本を専門の研究者の要望に応じて検視に供する以外、通常はタイプ標本金庫に収めています。研究者の要望といってもそんなに頻繁にあるわけではなく、標本あたり一世紀に数回でしょう。むしろ検証可能な状態に保たれている事自体に意義があります。たとえば失われたホロタイプの代わりにネオタイプを指定するためには「虫体が無い」事の検証が重要です。立派な図鑑に記されている学名も、きらびやかな展示に示されている学名も、すべてこのようなタイプ標本によって保証されているのです。

(自然・環境評価研究部 森林・昆虫グループ 沢田佳久)

学校『教材開発研究会』

今、学校は博物館を必要としています。

「はい、いらっしやい」「展示をごゆっくりご覧ください」
こんな時代は終わったのです。

県立人と自然の博物館には37人の研究員と3人のミュージアムティーチャーが勤務しており、各分野で大活躍している専門家ばかりです。博物館の豊富な学習資源を学校との協力のもとで活用することで、児童生徒が興味・関心を持って取り組み「科学する喜びと感動」を味わって頂きたい。そんな願いから『教材開発研究会』を立ち上げました。理科離れの防止や「総合的な学習の時間」の展開に少しでも協力ができればと考えております。

これまでも博物館と学校が共同で「子どもたちの学び」を思索する機会は多くありましたが、博物館側から学校側に専門知識だけを提供したり、学校が博物館に任せきりで、一方通行になりがちでした。その結果、学校の学習課程や学習内容に沿っていなかったり、博物館の資源を十分に活用できていない場合もありました。学社融合の視点には、双方向の交流が必要なのです。

『教材開発研究会』では、専門性を持つ博物館スタッフと教育のプロである学校の教員が一致団結し、共同で教材や学びの場を開発するだけでなく、実践へと発展させました。学校ごとの特性や地域の実態を活かしつつ、児童生徒の興味・関心に応じた学習プログラムを共同で検討したわけです。

まず、教材開発研究会の初回となる5月には、県下から小学校13校、中学校5校、高等学校4校の計22人の教員が集まりました。各教員が地域の実態や児童生徒の関心に応じた課題を持ち寄り、小グループ毎に分かれ、関連する研究員やミュージアムティーチャーと率直な



議論を行ないました。「驚き・発見・体験・感動」といった学習目標が達成できる教材の研究を深めていきました。

その後、6月以降は研究員が学校へ出向き、教員と共に地域を歩き地域素材を集め、いつどの時点で、どう授業に活かすか。現場の視点から検討し教材を開発しました。実際に教壇に立った研究員は「児童生徒の目の輝き」「次の学習へ繋げようと質問の多さ」等に感動させられたようで、「理科離れなんて信じられない」といった感想もありました。教育現場のニーズと専門性がマッチすれば、学習への意欲は高まるのだと思います。

12月には各校教員や博物館関係者をはじめ多くの方に参加頂き、授業の実践内容や研究員等との連携の効果を中心に中間発表会を行ないました。一例では、絶滅危惧種のトンボであるミヤマアカネを対象に、調査の方法やデータ作成法などを学習し、自然環境への視点の広がりが発表されました。また「小学生には難しいのでは」という気持ちもあったのですが、実際に取り組んだ結果、子ども達の能力と意欲の高さに、多くの研究員が驚かされました。学校の先生方と博物館スタッフが連携すれば、素晴らしい授業ができることや学校からのニーズの高さを再認識しました。

今年度末には、この実践事例をまとめた「教材開発研究会」報告集を県下の学校へ発信できると確信しております。

(スクールパートナー推進室 指導主事 上月啓輔)

編集後記：

ひとはくがマレーシア、サバ州で行っている、国際協力・交流について今回特集しました。一方ホームグラウンドである県内でのワイルドライフ問題、教材開発、さらにこれらの基礎となるコレクションについてご紹介しました。ひとはくの多様な取り組みの一端を感じていただけたらと思います。
(シンクタンク事業室 三枝春生)

ハーモニのバックナンバーは博物館のホームページ
http://hitohaku.jp/publications_index.html
でご覧いただけます。

人と自然の博物館ニュース
「ハーモニー」No.48

平成17年2月15日
兵庫県立人と自然の博物館
〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目
TEL(079)559-2001(代表)
FAX(079)559-2007

博物館ではインターネット上でも情報を提供しています。
URL <http://hitohaku.jp/>